

# 上野の杜の 波瀾 万丈

第十七回

## サールナートの壁画

吉田千鶴子

インドの仏跡に大壁画を描くという偉業によって日印文化交流史に輝かしい足跡を印した野生司香雪という美校卒業生がいた。

### 日本画家の派遣の経緯

日本の冬の時期は、インドではほのぼのと温かい晴天が続き、実に心地よいのだが、それ以外は灼熱・湿気の耐え難い気候が長く続く。そのなかで四年間、一時帰国もせず、種々の困難や貧困と闘いながら黙々と壁画の制作に打ち込み、見事に完成させた野生司香雪（二八八五〜一九七三）の精神力には感嘆するほかはない。戦後には長谷川路可によるチヴィタヴェッキアの日本二十六聖殉教者教会壁画（一九五〇年）や藤田嗣治によるランスの礼拝堂壁画（一九六六年）などの例があるが、戦前にも香雪のように壮举を成し遂げた卒業生がいたのであった。

さて、ダルマバーラ（Anagarika Dharmapāla 一八六四〜一九三三）という人は大菩提会（Mahabodhi Society）を創設した著名な仏教復興運動家で、幾度か来日し、日本の仏教界とも交流があった。彼は最晩年の

一九三一年、悟りを開いたブツダが初めて説法したサールナート（鹿野苑）にムラガンター寺（初転法輪寺）を建立。その内部に英国大菩提会副会長B・L・プロートンの寄付金によつて壁画を描くことになり、協議の結果、詩人タゴール（Rabindranath Tagore 一八六一〜一九四二）の意見に基づいて日本の画家に依頼することになった。

このことは大菩提会から酒匂インド総領事、日本外務省、日印協会、文部省、そして、正木直彦へと伝達された。当時正木は東京美術学校長にして帝国美術院長。美術の国際問題の多くは自ずと彼の判断に委ねられた。派遣画家の人選の結果、選ばれたのは桐谷洗鱗（二八七七〜一九三二）である。洗鱗は東京美術学校日本画科（選科）を主席で卒業し、第一回文部省美術展覧会に入選するなど、円熟した画技が高い評価を得ていただけでなく、インド美術の研究に造詣が深く、岡倉天心や詩人タゴール、さらに正木とも親交があったので、第一に白羽の矢が当たったのである。

### 交流の礎

近代の日印美術交流という点、まずは岡倉天心のインド旅行（一九〇一〜〇二、一二年）が挙げられる。天心はアジャンター石窟壁画

その他インド古代美術視察のほかスワミー・ヴィヴェカナンダ、タゴール一族、ベンガルの画家たちとの交友、インド独立運動家との接触など大きな足跡を残した。それに引き続いて天心の指示による横山大観・菱田春草（一九〇三年）、勝田蕉琴（一九〇五〜〇七年）らの渡印、桐谷洗鱗（一九一一〜一三、一七〜一八、二九年）、今村紫紅（一九一四年）らのインド旅行、詩人タゴールらの来日（一九一六、一七、二四、二九年）、堅山南風（一九一六年）のインド旅行、国華社・日本美術院によるアジャンター石窟壁画の模写（一九一七〜一八年）、インド人S・N・ボースおよびデー・スワンカール・ラーヨの東京美術学校留学（一九〇五、〇六年）、画家ノン

### 野生司香雪の奮闘

ドラル・ボースの来日（一九二四年）等々の事例が思い浮かぶ。こうした交流活動の蓄積によつて近代日本画というものがインドで評価され、壁画制作の依頼となったのである。

正木の要請を快諾した洗鱗は鋭意準備を進めた。ところが、出発間際の一九三二（昭和七年）七月一九日に腹膜炎で急死。正木は「不常の感転深し」と日記に記して惜しんでいる。そこで代理として急遽選ばれたのが洗鱗の日本画科同期生（本科）でアジャンター石窟壁画模写に参加した野生司香雪だった。香雪はサールナートの壁画に「釈迦一代記」のどの場面を描くかを高楠順次郎・渡辺海旭および日印協会員たちと相談したと述べているが、七月二十四日には正木も訪問して何事か相談している。そのようにして周囲と相談した上で下絵を準備しようだが、インド出発が十月二十六日だったことを考えると準備期



5



4



3



2



1

1. 桐谷洗鱗 卒業制作「蜘蛛」明治40年 東京藝術大学蔵
  2. 野生司香雪 卒業制作「黄泉」明治41年 東京藝術大学蔵
  3. カルカッタにおける歓迎会にて 香雪と詩聖タゴール
  4. サールナートのムラガンダー寺院
  5. ムラガンダー寺院壁画のうち降魔図
- 3.4.5は「野生司香雪 仏画の世界」(信濃毎日新聞社、1987年)より転載

間が短すぎるような気がする。恐らく洗鱗が描いた下絵に基づいて本下絵を描いたのだろう。洗鱗の弟子の河合志宏が助手として同行したのもそのことと関係がありそうだ。

だとしても、実際に壁画を描くのは容易ではない。十一月二十五日にカルカッタに到着した香雪は在印日本人たちや大菩提協会たちの歓迎を受け、病床のダルマバラから「仏教によって育てられた日本美術を、仏教発生の地、この印度に再び迎へることを得たのは誠によろこばしい」云々と労われた。詩聖タゴールも歓迎会で日印文化交流に関する講演を行い激励した。

かくてサールナートに着いて現場を見れば、石造りの建物の内部を煉瓦積みにし、コンクリートで覆った上に絵を描くべき壁がしつらえてあった。いざ着手してみると絵の具の変色が著しく、耐久性は望めない。アジャントの壁画の下地のように特殊な粘土と牛糞と象の糞を混合し、糝殻のほか二、三種の植物を混ぜて塗るのが理想だが材料も職人も得られない。そこで研究に研究を重ね、近代的科学を応用して下地を塗り直し、千年くらいは保つぐという自信をもって描き始めたが、予定の三十図の半ばにも達しないうちに資金が尽きたので、ボンベイで自作の展覧会を開いて金を得て制作を続け、一九三六(昭和十二年)四月九日に完成。

同年十一月三十日に大勢の出迎えを受けて帰国し、十二月十二日には上野精養軒で正木直彦、横山大観らも出席して盛大な歓迎会が開かれ、香雪の名は全国津々浦々に知れ渡ったのであった。